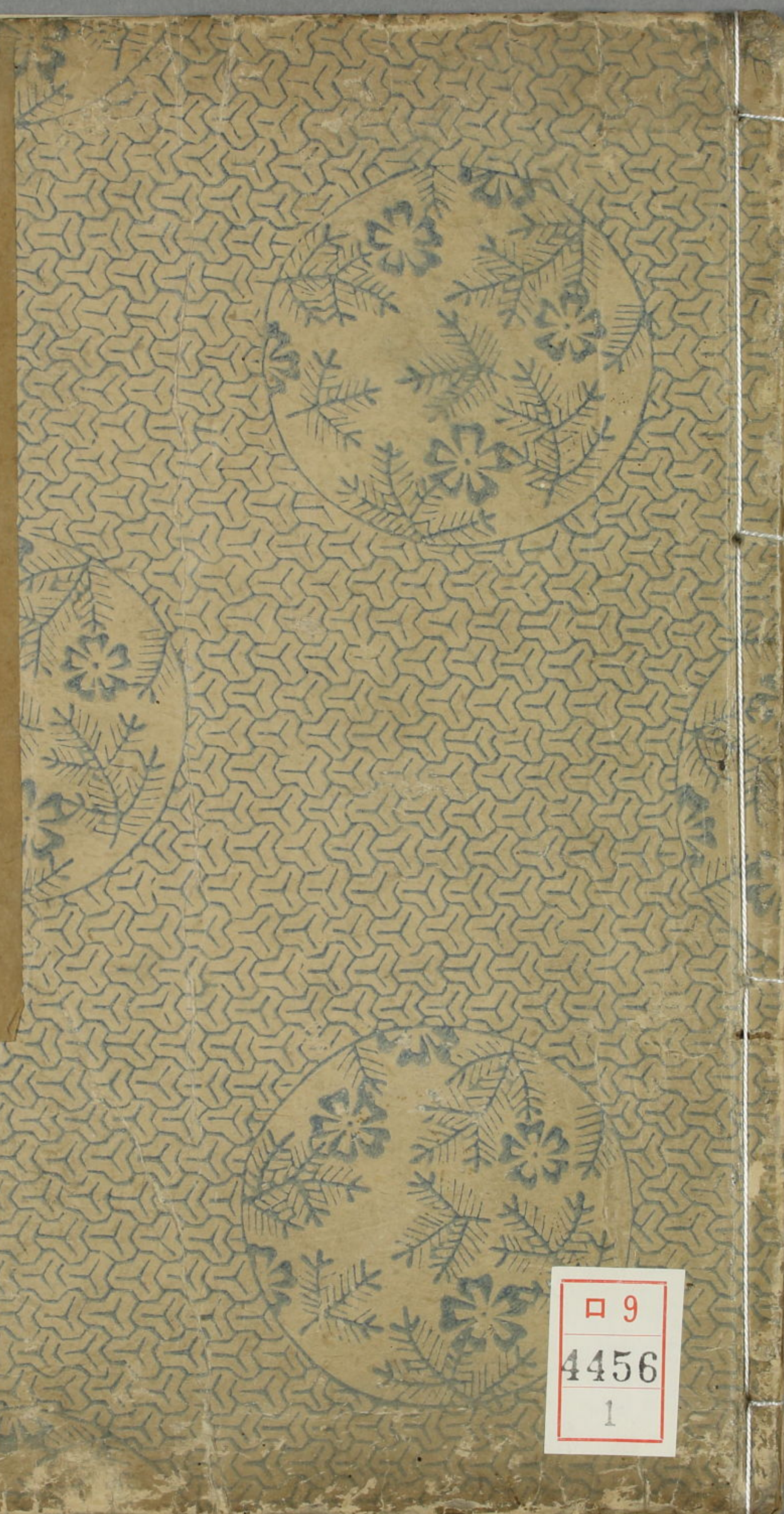




教訓  
いろは歌  
上



□ 9  
4456  
1



鈴木春信 繪

教訓のりは歌

三巻



序



君乃ち志を育ぐるは清代よりまじ他の  
 性るるは枝乃花よりく管もさ家  
 和弄り志らふよふとやいもんや人  
 をや幼稚乃のりはにほへとよま  
 習ふよとあやうと志その業より

不<sup>ふ</sup>斗<sup>と</sup>一<sup>一</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>博<sup>り</sup>識<sup>ち</sup>人<sup>ら</sup>を  
誹<sup>そ</sup>謗<sup>と</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>え<sup>え</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>三<sup>三</sup>十<sup>十</sup>一<sup>一</sup>又<sup>又</sup>あ<sup>あ</sup>を  
る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>ま<sup>ま</sup>誣<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>教<sup>こ</sup>訓<sup>く</sup>い<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>は<sup>は</sup>教<sup>こ</sup>と  
題<sup>ど</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>書<sup>ま</sup>林<sup>ん</sup>申<sup>ん</sup>板<sup>せ</sup>堂<sup>う</sup>一<sup>一</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>  
き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>書<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>録<sup>ろ</sup>本<sup>ん</sup>氏<sup>し</sup>一<sup>一</sup>需<sup>し</sup>梓<sup>そ</sup>み  
ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>ば<sup>ば</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>な<sup>な</sup>叙<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>い<sup>い</sup>

ゆ<sup>ゆ</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ハ<sup>ハ</sup>比<sup>ひ</sup>じ<sup>じ</sup>玉<sup>ぎ</sup>あ<sup>あ</sup>べ<sup>べ</sup>一<sup>一</sup>き<sup>き</sup>  
幼<sup>お</sup>稚<sup>ち</sup>乃<sup>の</sup>翫<sup>あそ</sup>弄<sup>び</sup>物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>柳<sup>い</sup>き<sup>き</sup>の  
柳<sup>い</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>僕<sup>おれ</sup>が<sup>が</sup>甚<sup>た</sup>幸<sup>さい</sup>な<sup>な</sup>らん<sup>ん</sup>  
等<sup>ら</sup>瓜<sup>う</sup>地<sup>ち</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>畢<sup>ぬ</sup>

禿<sup>く</sup>帚<sup>し</sup>子<sup>こ</sup>書<sup>しよ</sup>

い

いはまらふ

いとぬ人

いさ

いふ

いふ

いふ

いふ

いの中

世の中の人情を知らず人を欺る者も我とて福者とまふべし  
論のふかき世の中より我をまふ人多し今日利を得る福者といふも明日不義ありて  
其利はとて世をまふとて用世ありは終くまらぬ人徳ありは幸なり



ろ

論語よみの

論語よむ

論よむ

論語よむ

論語

論語



学文として身持の要をそとて諺論語よみの備後志らばといふ後れとそふか  
自己が非ぬまはせむとせよ世を害するはよく世を育むる者い自己がふくまゆえは  
其害をかくむる害なるをまはせむとせよ世を育むる者い自己がふくまゆえは  
そのいりおりにしるべきなりとて世を育むる者い自己がふくまゆえは  
そのいりおりにしるべきなりとて世を育むる者い自己がふくまゆえは

言ひつゝもく画はう退後痘瘡とて世に論人の乃小わはなれやと不疎即て人小  
 のまの信公すは是人の乃小わはなれやと不和合の付のぼく人乃まうとれとの也



に

ふくくと

柔和な

あやれが

はまのうい

贈まねな

し

人いしけなれとと袖はあししむ夜しほをいねとらとさ事公教ゆはのねとあぐ  
 じ人まの乃の袖はあししむ夜しほをいねとらとさ事公教ゆはのねとあぐ



は

もらぬ

私志くぬ

らうしや

袖はあしむが

くられ

かとの素

佛とはけと訓い後つやくわけるといふ義也と云ふ公邪飲の爲ふ佛は神と此れを  
 彼後を神を神を神と訓い後つやくわけるといふ義也と云ふ公邪飲の爲ふ佛は神と此れを  
 知る事なりと云ふ所の義は公邪飲の爲ふ佛は神と此れを  
 知る事なりと云ふ所の義は公邪飲の爲ふ佛は神と此れを



佛

やま

佛  
ほどけぬ

むねの

佛  
ごんま

ほ



へ

返答も片座

ゆえの

片

片  
片

團  
団

せよ

不細作の破らるる物に破らるる付この業破れ誰が破らるるやと問ふ事ありまはりて  
 不細作の破らるる物に破らるる付この業破れ誰が破らるるやと問ふ事ありまはりて  
 不細作の破らるる物に破らるる付この業破れ誰が破らるるやと問ふ事ありまはりて



と

友と

徳有るもの

年寄と

と

世より

同多

まじく

はうに人老人を蔵する年より人を蔵する者には何の益もなしといふも  
 愚者か益の得るはれも古き世の中に入りてあるを謂はし同多およぶと  
 男ふや長者世その長者の眼より人乃賢愚をさすはるる世の侯ふ  
 万年の徳の甲より人の年此功といふもまじくや若く人より人を蔵するはれ



ち

ちよりと

眠まじく

ちや

ち

ち

ち

人の妻を者肉公もちやけれ共介境界おぬ他人を相すも事也女も方乃  
 すまのれい共家共よりつる妻はつとぬれぬをわたりて不義のじをけり  
 なりまはすべし此本よりじ出さくべし北條時はく其家亡と戒り

り

利口がま

つらみみど

理くく

理も

事

理非る

生質辨舌のくはるは辨者公とて利口者といひ知恵ある者く扱は申に  
辨者公とて利口者といひ知恵ある者く扱は申に  
辨者公とて利口者といひ知恵ある者く扱は申に  
辨者公とて利口者といひ知恵ある者く扱は申に  
辨者公とて利口者といひ知恵ある者く扱は申に



ぬ

絶物

絶得ぬ

く

絶つらみ

皆くぬ

わつて上りよ



昔おしき話わて長髪と絶得ぬ女房係が洗髪しゆる合はし裏衣を多く長髪を以て彼  
髪を以て長髪を以て洗髪しゆる合はし裏衣を多く長髪を以て彼  
髪を以て長髪を以て洗髪しゆる合はし裏衣を多く長髪を以て彼  
髪を以て長髪を以て洗髪しゆる合はし裏衣を多く長髪を以て彼  
髪を以て長髪を以て洗髪しゆる合はし裏衣を多く長髪を以て彼



権威けんいはほろそ不義ふぎを巧たくまく入肩いりかた同どううて憐愍れんみんの窓まどを掃人せんじんをど共好ともこのむすむすか  
 罪垢つみかは鬼神くわんじんこれなるるふはせめとほりやと事こととのにせ今更いまさらいすおしんあ



己おのれの  
 身み乃の  
 上うへ

和欲わよくの勝かちをもちて己おのれを親類しんるい一屬いちぞく又また見みりて不和ふわ合ありし他人たにんの事こと細こまく志こころは  
 いとも只ただのにもく廣大くわんたいの天地てんちをせすか行なくとも浪なみするはあやか改かめ和わ合ありし



親おや屬ぞくと不和ふわ  
 浪なみする  
 浪なみする  
 浪なみする  
 浪なみする

わ

わがね子

我の顔なり

わがこ人

辨るるを

禍乃

もや



わがね子人のほろにんぢにんか朝晴志く是非公辨より人のをいふて  
まゆをちく願し武を争い争いに助をいふて流をまふりつじく  
人かしてま眼をまわら徳をまわらまのりあやまら

か

必

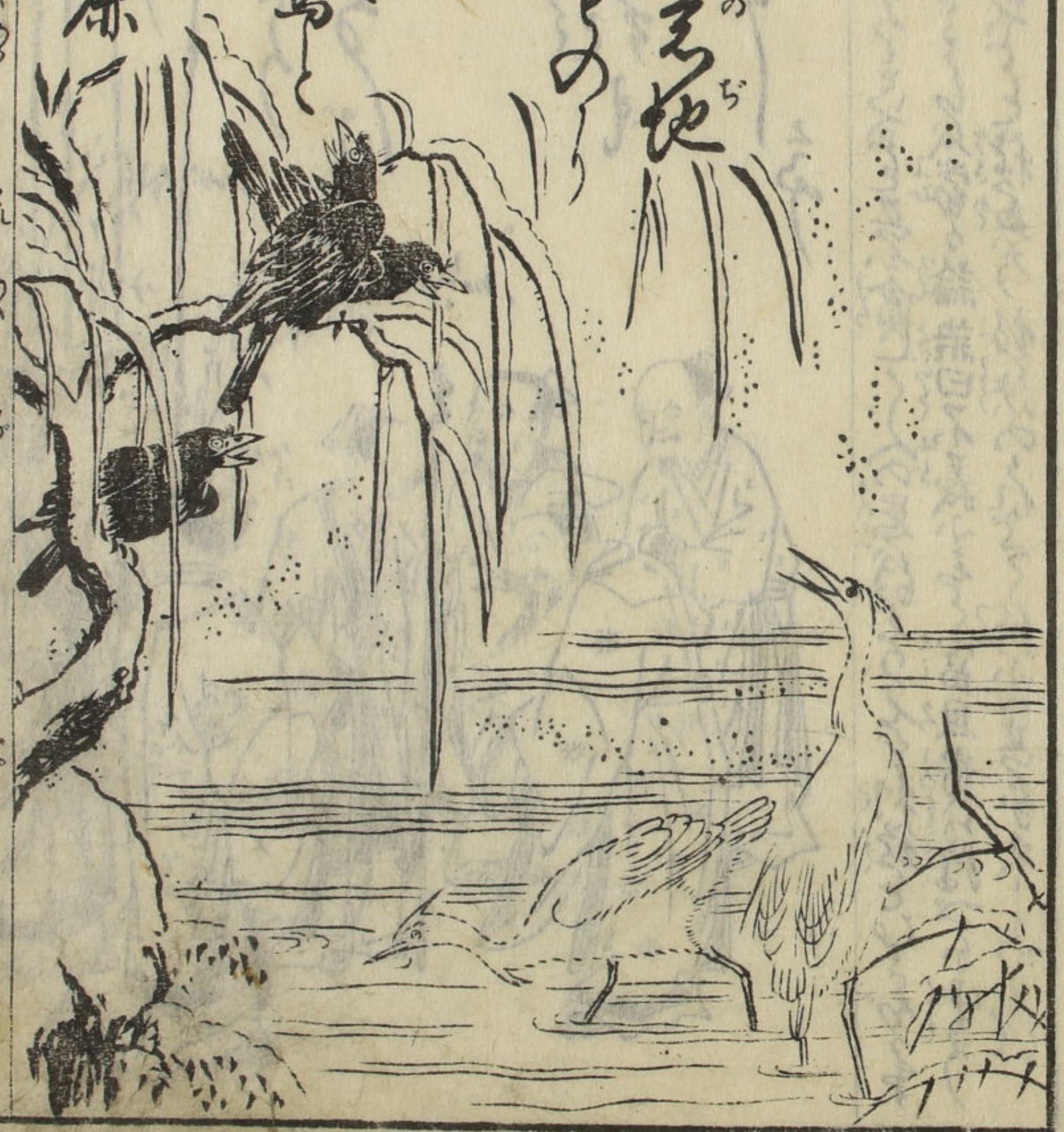
片ま地

もの

かまよ

鳥か踏鳥

かまよ



世の中はなるものなるに形者なり又是も新なる者也と志はるまは情こそいふ人の  
せむれゆかり必のよふに智のよふに世はあやなり是かゆゆじこ人といふ也

よ

よき程

世にまじり

あは

よるやか

よその栄花も

余はよえり

なり



是れ富貴なることと其心合はく人の患ひをそのつとを利後としやがる事  
人々の道にあらば必りさしとらふ論語曰く義小を富且貴は富ぶる事なり  
おし今自時をたさしとらふと後無乃後映のたさくは小の富貴なり

